



回想  
interview

それぞれの世界選手権。  
この経験を糧に次なる舞台へ



失意だった。平成28年度全日本選手権（2017年1月）。優勝を目指した男子シングルス。まさかの初戦敗退。早々に会場から姿を消した。それでも大島祐哉（木下グループ）と組むダブルスでは、国際大会で活躍。「ダブルス」では結果が出るだけに、もどかしい日々が続く。

最高位では21位だった男子シングルス世界ランキング（2015年8月）も気が付けば、63位（2017年5月）まで落ちてしまった。それでも4月に行われたアジア選手権では、混合ダブルスで銀メダル、男子ダブルスでもベスト8入り。結果を残した。

1試合ずつ全力でプレー  
モチベーションは高かった

『今大会の目標は？』大きな大会前に、メディアが必ず質問するフレーズである。しかし森蘭たちは特に目標を定めていなかったそうだ。

「1試合ずつ全力でプレーしよう。ただそれだけを大島さんと話をしていました。倉嶋監督、田勢コーチからも『金メダルを目指せ』と良い意味で発破をかけられていました。そういう意味では毎日の練習が真剣でモチベーションは高かったです。でも今振り返ってみると、試合になったら勝ちたいと

いうことを意識してしまっただけで、準々決勝のチャイニーズタイペイ戦は、メダルを意識しすぎて、硬くなってしまうでしたね」

ダブルスはコンビネーションが重要である。しかし、意外にも2人は遠征先で同じ部屋に泊まることになっても、特に会話や交わすことはないという。しかし試合になると、次はどうするかなど、戦術的な会話が増えるという。

「長年ペアを組ませていただいているので、こういう場面ではこういうことをしてくれる、など技術的な部分は把握しているから、相手がこういうことをしてきているから、こうしようとか、戦術的な会話が多いです。」

また、世界選手権は特にそうなんです。ゲームカウント3対0でリードしていても、1ゲーム取られたらわからなくなるし、1本でも取られたら流れが変わるケースがあります。お互いに『これから集中だよ』ってフレーズが多いと思います」

経験。2015年蘇州大会は、中国ペアに、マッチポイントを取りながら、逆転負けを喫した。その経験は大きく、あの1本があったからこそ今があるとも話す。

「2年間ずっとワールドツアーに出させていただいた。長い時間ペアを組めたことで、ペアリングが良くなったと思う。」

森蘭 政宗  
MORIZONO MASATAKA  
(明治大)

2年前から  
見えたモノ

1試合ずつ全力でプレーしようとパートナー・大島と話して臨んだ今大会。長年組んできた経験が花開いた。挑戦はこれからも続く。

蘇州大会の時は、マッチポイントを取っていたこともあるので、前回の方が良い試合だった、という見方が大半かもしれないが、自分たちからしたら、今回もあの時と同じくらい勝つチャンスがあったと思う。数字では言い表せないんですけど、あそこ1本が取れていたら、と思うシーンがたくさんありました。実際に落としたゲームは全て先に9本取っているんです。しかし、そのシーンで1本を取らせてくれない、簡単にミスをしたくない。中国って凄いです」

差は縮まっている。  
しかし土壇場の質の高さは  
見習う必要がある

ダブルスで対戦した中国ペアの感想を聞いてみた。

「樊振東選手のレシーブではなく、ラリー中の身体を入れてから繰り出すミドル前バック前のチキータ攻撃。1本もミスはしないし、質が高い。許昕選手は、中陣からの重いフォアハンドドライブ。中国との差はたしかに縮まっていると思うのですが、土壇場での集中力、個人の技術、質の高さは見習わ

ないといけません。

ダブルスだけで言えば、私のチキータレシーブはまだまだ効果的だな、と感じました。ただこれからは研究をされて、対応して行くと思うので、進化する必要があると思います」

これからさらに活躍するために必要なことも質問してみました。

「体力的、肉体的なことは、体重比率から考えると、中国と大差はないと思います。男子シングルス決勝を見て感じたことは、自分とはプレーの質が全く違うな、ということでした。きつと現実ではありえないピッチで練習しているのだと思います」

近頃取り組んでいる練習は、メンタルトレーニング、だそう。

「メダルは獲れたけど、これでいいのかと不安になる。結局その不安が収まるのは試合で勝つこと。どうやって試合で勝てるのかを練習で考える」

明確な目標を持つことも、落ち込まないために必要なことだ、とも話してくれた。

目標を持つこと。目標に向かって努力することは困難が多く、厳しい道が続く。森蘭の挑戦がまた始まる。